

この十の要求をすべて充足できる宗教は、完全な宗教といえる。すべての世界宗教が初期の段階ではそうであったように、この宗教はまず少数派の宗教として社会に投じられ、そしてそこからそれ自らの完全性の力と吸引力で周囲に広がっていくのである。同じ地域にある既存の宗教は、放置しておいても、徐々に静かに衰退していくか、あるいは、存続しようとすれば徹底的にそれを受け入れるかのいずれかになるであろう。

八 結論

アジア共同体の概念は、実行可能であるのみならず、そう遠くない将来に実現され得るであろう。異なった人種、言語、宗教、および文化の人々が、もしも同等の地位、権利、そしてもちろん、進歩のためのよりよき機会を与えられるならば、一つの共同体の中で調和して生きるということは、極めて可能なことなのである。

異なった宗教を統一するということは、何よりもはるかに難しいことではあるが、そして、より長い時間とより大きな努力が必要ではあるとしても、その可能性が全くないわけではない。少なくともそれは挑戦的であり、試みる価値のあることである。

セッションⅢ

儒教の経典から見た

アジア共同体構想と宗教統一



張基權 (Chang Ki Kun)

一九二二年生まれ。ソウル大学校卒業。文学博士号取得。ソウル大学校教授、自由中国国立政治大学教授、成均館儒教学術研究員を経て、現在、誠心女子大学教授。専攻、中国文学。主な著書『論語・孟子・孝子・老子』『陶淵明・李白』他。

一 序言

形而下の存在万物は外形的には、みな殊異である。しかし、すべてが無形の天(神)によって創造されたものであり、形而上の天道・天理によって生成変化する点では同一である。すなわち外形的・個別的には小異であるが、本質的・全体的には大同である。

形而下の社会科学による共同体構想は過程にすぎない。終局は形而上の宗教的立場で成就されねばならない。宗教は時間と空間を超越した(あるいは、包括・統合した)絶対を悟らせ、あわせて絶対善を実践させる教えである。現実的政治の立場では小異・小我を超えられない。宗教的教育によって、すべての人々は大我・大我の境地に到達できる。万物の霊長である人間はそのような本善性を生まれながらに有している。

一方、無神論は人類の歴史は人々の力のみで綴られると錯覚しているが、実は、神(天・天理)がウラで撰理しているのである。従って天運にのり、善世界を実現するためには、神(天)に帰一する宗教的立場に立たねばならない。

本論文は、三部に分かれている。一部では、利己的国家絶対主義に陥っている世界人類の危機・病弊を克服・救済し、さらに進んでアジア共同体と世界大同を構想する大前提として、宗教的教育による人間・人格再建と教育革命を主張した。二部では、中国古代での天と天道による王道徳治および祭政一致と、後代における天・天道の理(Logos)化を述べた。三部では、人類の成長発展にともなって神の対応が変わってきた

歴史的事実を述べ、「大同世界」にはすべての宗教・教派を統一した最高神・共通善の頂点が必須であることを主張した。一つの神の下でこそ一つの世界が実現できる。宗教統一なくしては、アジア共同体も、その拡大した世界大同も構想することができない。

二 共同体構想の前提と現実問題

(1) 共同体構想の大前提

「一つの人類世界」はすべての知性が長い間望んできた理想的目標である。また、その間の人類歴史は、多くの障害があったにもかかわらず、漸次に人類大同の方向に発展してきた。

ある者は、人類歴史は善悪の相転勝敗と悲観する。しかし、それは間違っている。もし、神(天)がウラで善を保護してくれないとすれば、とうの昔に、善は滅亡し、また悪もはびこることなく、独りになったはずである。自分以外のすべてに敵対し、手段かまわず、必ず相手を滅亡させるのが悪の生理である。悪徳暴君も必ず死に、弱くて闘う力のない善人が続々この世に生まれ増加していく歴史的事実こそ、神の摂理によるものである。

人類の歴史は天(神)と天道によって限りなく善化発展するという楽観がなければ、アジア共同体や世界大同は構想もできない。神への帰依から楽観がうまれる。

小異・小我を克服して大同・大我に帰一して共同体構想ができる。孔子は「克己復礼」といった。すなわち「自己を克服して天理に復帰すれば天下が仁に帰する」。呂氏春秋には、「天地万物、一人之身也、此之謂大同」といい、康有為は大同書で、「世界大同」のためには国家を超えて世界公民になるべきだと主張し、譚嗣同は仁学において、「地球之治世、以有天下而無国也」といって、国家を超えた地球村世界を描いた。

しかし、今の世界人類は危機の中に陥っている。外形的・物質・科学・武力のみを追究し、人間疎外と精神喪失の病弊に陥っている。まさに中国の古典が指摘している通りである。

「人化物者、滅天理而窮人欲者也」(礼記)

「德者本也、財者末也、外本内末、争民施奪」(大学)

「飽食煖衣、逸居而無教、近於禽獸」(孟子)

(2) 現実的問題点

「一つの共同体」は、武力征服や霸道統合でない王道徳治で成し遂げられるべきである。先に極東の三国、韓国・日本・中国における現実的問題点を挙げれば、次のようである。

① 民族の相異性

民族の形成は、一次的には風土、環境、血統をもとにし、その上に、二次的な生活様式としての言語、風俗、文化、宗教が複合し、それらが歴史的に凝集してなされる。従って民族の相異性は、一時的、制度

的、強圧的にはすぐ解消するものではない。しかし、世界のすべての民族は、家族↓民族↓種族を経て、漸次に拡大・発展して形成されたのである。現在の民族国家も変わるであろう。現に「多数民族一国家」が中国、米国、ソ連である。「一民族一国家」の枠は、もう既に科学、技術、経済、文化の面ではほとんど無に近い。ただ偏狹・利己的政治家が権力支配の枠として固執しがちである。大我・大人の政治で各民族の獨創性を十分に發揮できる大同世界の實現を期すべきである。

② 国家体制、政治経済の相異性

民族・言語 生活・伝統	大韓民国	半万年歴史の間に成された単一民族、文化・伝統分断	分断拡大益々異質化	漢族中心の文化拡大。但し多数の少数民族包有社会	漢族中心の伝統文化社会	長久な歴史によって一民族・文化伝統形成
	北 韓	自由開放、民主化、軍事文化清算、但し理念的混乱	極端共産主義閉鎖政策	修正共産体制部分的自由開放理念的混乱潜在	三民主義中華傳統文化政策	民主・開放政策、保守革新の調和、但し保守的安定体制、理念的混乱
国家・政治 理念・体制	後進↓中進↓先進に指向	軍事武器の外は落後	軍事強大国、但し平和産業経済は後進↓中進指向	中進↓先進	高度發達、富裕、世界経済を支配	殆んど完全な自由・民主、外来・伝統の調和獨創的發展
科学・技術 産業・経済	漸次、外来文化・傳統文化調化、自由、獨創的發展	唯一思想下で苛酷な統制	過渡期的自由民主化実用主義	自由・民主但、一部の思想的統制	殆んど完全な自由・民主、外来・伝統の調和獨創的發展	神道・仏教普遍、但し基督教的信仰は低調
教育・文化 芸術	宗教興盛、但し分派・混乱甚大	宗教無宗教的哲學・思想無	原則的・全般的には無宗教、但し一部開放	仏教・土俗信仰盛行、外来・基督教不盛	宗教・土俗信仰盛行、外来・基督教不盛	基督教的信仰は低調
宗教・哲學 思想	派・混乱甚大	宗教無宗教的哲學・思想無	原則的・全般的には無宗教、但し一部開放	仏教・土俗信仰盛行、外来・基督教不盛	宗教・土俗信仰盛行、外来・基督教不盛	基督教的信仰は低調

右記の表から次のような問題点が挙げられる。

- ① 韓国と中国が分断国として理念・体制対立。
- ② 両極化対立も、実用実利と指導者によって修正・解消可能。孔子日、人能弘道、非道弘人。
- ③ 南韓、台湾の反共政策が軍事的独裁誘発。今は自由化・民主化の下で無中心の混乱惹起。
- ④ 北韓の主体思想による革命戦略拡大は平和を威脅する。
- ⑤ 国際社会における日本の重要性。指導的立場にたち、決して支配的軍事大国になるな。

(3) 利己的国家絶対主義と克服の方向

今や世界は国家単位の分立・競争、ひいては対立・闘争の段階にとどまっている。EECやアジア共同体を経て「一つの世界」が望ましい。科学・経済は国境を超えて發達しているのに、政治理念や人間・人類の思想はいまだに閉鎖的である。そのため、すべての国は「利己的国家絶対主義」に陥っている。政治体制としての国家が絶対である。その前には、人間、個人、国民の尊嚴等が軽視され、すべてが国家への隷屬をよぎなく強要される。国家の前には、神も、天道・天理もない。宗教は政治から追放される。しかも弱肉強食の国際競争での敗北は、国家・民族の滅亡に直結する今日、すべての国家は富国強兵に熱中しなければならぬ。ここにおいて、国家を中心にした、科学↑↓経済↑↓武力の相互的悪循環が起ころ。

また国民に対する教育・文化政策も、ひたすら科学、経済、国力増強に集中され、対外競争意識と閉鎖的国粹主義を培養しようとする。もちろん親善外交やオリンピック参加も一つになるよい過渡的段階にはなる。

三 中国古代の天と古来の理 (Logos) 化

(1) 古代の上帝信仰と祭政一致

中国でも古代では、至高無上の唯一神を崇拜した。周林根は中国古代禮教史で次のように述べた。

- ① 人之生命為上帝所賦予、寿夭長短、天実司之。
- ② 上帝為人立一道徳軌則、使人遵守、有如旧約之十誡或律法。
- ③ 上帝不僅定出道德規範、且令人遵循。∴且常監察人類、看其是否守此規範。
∴由此可知中国古代信上帝為又真又活之人格神也。
- ④ 王乃天之元子、代天主民、亦稱牧民之主。
- ⑤ 人順脆天命、則無災害、而天錦之福。
- ⑥ 古者政教不分、天子主祭祭天、是天子有如祭司。
- ⑦ 古人因信上帝、故嘗禱告。
- ⑧ 古代人亦相信人死則歸命於天、賢哲之士、且可在帝左右。故謂人死日、歸天。

(2) 詩經・書經にあらわれた天帝と王道徳治

古代の上帝は基督教の神のように意志を持っていた(項目別に詩經・書經から若干を示す)。

- ① 天は人間、万物および法則の創造主である。
「天生烝民、有物有則。民之秉彝、好是懿徳。」(詩・大雅・蒸民)
「天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教」(中庸)
本性は善、常道を行うようになっていく。気品によって調節して履道されるのが教育である。学は覚と効であり、天道を悟り実行するのが人間の責任である。
「順天者存、逆天者亡。」(孟子)
「天生烝民、其命匪諶」(詩・大雅・蕩二)
② 天帝は民を愛する。
「皇矣上帝、臨下有赫、監觀四方、求民之莫。」(詩・大雅・皇矣)
「天亦哀于四方民、其眷命用懋。」(書・召誥)

旧約のエホバはイスラエルの民族だけを選民として愛したが、中国の天帝は万民を博愛した。キリスト教ではメシヤを降生させて救済する。中国では有徳者に天命が降り、天子として万民を養育させる。天子は常に祭天して天意を受け、天道を実践しなければいけない。失徳すれば革命される。

「維此文王、小心翼翼、昭事上帝、懷多福、厥德不回、以受方畀。」(詩・大雅・大明)

「天道福善禍淫、降災于夏、以彰厥罪、肆台小子、將天命明威、不敢赦、敢用玄牡、敢昭告于上天神、后、請罪有夏。」(書・湯誥)

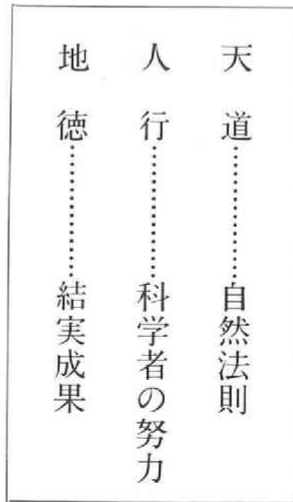
「克明德慎罰、不敢侮鰥寡。庸庸、敕敕、威威、顯民：聞於上帝、天乃大命文王。」(書・康誥)

「天子祀上帝、諸侯會之受命焉。」(國語・魯語)

「天視自我民、天聽自我民聽。」(書・秦誓中)

であるから、為政者は「天が甚愛する民」を慈愛・発展させねばならない。さもないと『天降喪乱』(詩・大雅・桑柔)する。王道徳治とは、無形の天道・天理を人間が悟り、それを活用して地上世界で立派な成果を上げることである。自然科学において、目に見えない自然法則を科学者が発見し活用して、地上にて科学的成果を上げるのと同じである。

これを天道―人行―地徳という。王の字は天・地・人を上から下に一貫するの意である。自然法則も天理の一部であり、人間が天理を悟り行動的に実践して地上に理想世界を実現すること教えるのであり、それが目的とする宗教も広い意味の科学である。このように中国では天に対する信仰を理性化してきた。



(3) 天と天道の理 (Logos) 化

中国古代の唯一信仰は、個人的次元から国家集団的次元を経て、天下世界の正治思想に発展した。すなわち、信仰の幅が拡大したと同時に、宗教の機能や価値が国家、世界の政(正)治に上昇した(今日でも、個人祈禱的な低級信仰が見られるが、それは望ましくない)。周代に至って、禮、禮教、禮治の觀念が発展した。禮記表記篇に次のように見える。

「殷人尊神、率民以事神、先鬼而後禮。周人尊禮尚施、事鬼敬神而遠之。」

孔子も「務民之義、敬鬼神而遠之、可謂知矣。」(論語・雍也)と言った。「至聖先師」たる孔子は「不語怪・力・乱・神」で、人本、現実、合理、歴史、文化主義的政(正)治哲学を実践的に教えた。その後、漢・唐代でも儒家の禮教と王道徳治が尊崇された。宋代には近世儒学としての性理学が程・朱によって集大成され、「天即理」として理性化した。次に①天・天道、②禮と禮治、③太極と理の三項に分けて、中国における神(天)の理化を述べる。

① 天・天道 (一大之道)

孔子も天に祈禱し、天に対する内心的信仰があつた。しかし彼は理性と主知主義的立場で教育した。すなわち、迷信・盲信・狂信の立場で天を信じ天道を実践することを抑え、理智的に天を認識し、実践的

に天道の具現を主張した。孔子は言った。

「天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉。」(論語)

天は時間と空間の総合実体である。無形、無言であるが、時間的運行とともに空間的に万物を生生不已(限りなく創造・発展)させている。天は創造主であると同時に永遠、無限な創造・発展の摂理の主宰者である。機能、作用を通しての天に対する認識、それは理性的、学問的、科学的認識である。

時の流れとともに、永遠に限りなく万物を生・成・化・成(創造・発展)させる天の原理法則が天道である。「天」の字は「一・大」の合字である。従って、天道は「一大之道理」である。「一」は空間的には個体、時間的には瞬間であり、「大」は空間的には全体、時間的には永遠である。

従って「一と大」を総合した天は、「個体と全体」「瞬間と永遠」を統合し、併せて「時間と空間」をも統合して「生生不已」させる無形の実体であり、そのような道理が天道である。人間も天の所生であり、天道に従って生・育・化・成する。天を悟り、天道を実践するということは、自然法則を了解し、法則に従って科学的成果を上げることと一致する。無形の自然法則を悟り活用して、創造的發展を成就することが迷信でないように、天を悟り、天道を実践して、地徳をたてる宗教的境地も迷信ではない。

天は嶺であり至高無上でもある。またすべてを統合した「一」つでもある。従って天は「太一(もったも大きい一つ)」でもある。説文解字では「一」を次のように解いた。

「惟始太初、道立於一、造方天地、化成万物」

天地万物の生成発展の根源と摂理の主宰者である「天」は「至高無上の一」である。キリスト教では「一つなる神」とよんでいる。(この項の詳細は拙著論文「儒教の原理と本義」参照)

② 禮と禮治

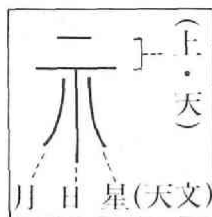
禮の字は本来、「祭器(U)に、貴重な祭物(王)を供え、台(示)にのせて、天に祭祀して、天から啓示(示)を承け、その天理を履行して福を致す」という意味を総合したものである。

禮(示) || 理(王) || 履(示) である。説文解字には次のように云っている。

「禮、履也。所以事神致福也。従示従豊」

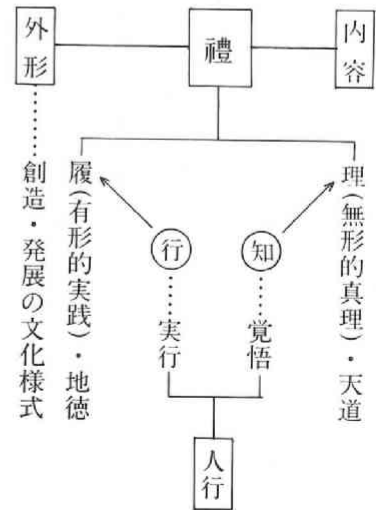
「示」は啓示である。天が日・月・星の天文を垂らして、吉凶を示す意味である。

「示、天喜象、見吉凶、所以示人也。従一(故上)、三、垂明星也。」(説文解字)



	天		
	大	一	
天	全体	個体	空間
	永遠	瞬間	時間

禮を「礼」とも書く。人が跪いて天から啓示を受ける意味を表わしている。また禮は天理であり、天理は天道である。天道は天地万物が永遠・無窮に創造・発展するための道理である。天理・天道を認識・実行して、宇宙、天地、万物と一体になり、ともに創造・発展する世界大同を実現する主体者が人間・人類である。禮の内容は天理であり、禮の外形は天理に従って創造・発展する文化様式である。目に見えない天理を有形的に華咲かせるのが、人類文化であり地徳であり禮治である。

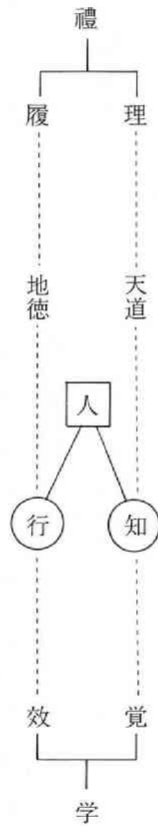


「夫禮、先王以承天之道、以治人之情。故失之昔殆、得之者生。」(禮記禮運篇)

「夫禮者、經天地、理人倫、本其所起、在天地未分之前。故禮運云

夫禮、必本於太一、是天地未分之前已有禮也。禮昔、理也。其用以治、則與天地俱興。」(礼、正義、序)

禮の根本は「太一・天」である。禮治は「一つに止まる、正治」と同じく、大学の「止於至善」の境地でもあり、「神、天治の境地」でもある。禮―理―履は学―覚―效と同じく、根本は天道・天理を自覚し、それを做效・履行することである。東洋の学問精神は、天道を悟り地徳をたてることである。修己治人・天人合一である。禮と学の関係を次に図示することができる。



人間は宇宙万物の靈長であり、天道を覚悟し地徳をたてる認識と実践の主体である。

③ 太極と理

宋代の性理学者は、天を更に理化した。朱子を中心に若干を述べる。

「太極只是一个理字」(語類)

「太極只是天地万物之理。在天地言、則天地中有太極在万物言、

則万物中各有太極。未有天地之先、畢竟是先有此理。」(同上)

「人人有一太極、物物有一太極」(事事物物、皆有個極、是道理極至。)

「総天地万物之理。便是太極。」

「太極只是个極写至善的道理。」(同上)

「太極只是箇一而無对者。」

「無極而太極、只是說無形而有理。」(同上)

「理也者、形而上之道也、生物之本也。」(答黄道夫書)

唯一無二、至高無上の天を理、道、太極と見た。『宋明道学』の著者・孫振青は言った。

「太極是創生天地万物的最高実有、相当於道家之道、和西方哲学中之上帝。」（二九三頁）

以上のように、儒教では創造主であり主宰者である「天・上帝」を漸次に道理化した。すなわち「唯一最高の人格神」天・上帝↓天道↓禮・理↓太極」として把握した。（詳細は拙著論文「朱子の本体論と理気説」参照）

四 人類の発展と神の対応

（1）人間の認識と神の実在

自然科学の法則は目に見えないが機能する。学んで悟った人には法則が実在すると同じく、宇宙万物に機能する一元的実体である神、天も、悟った人には実在するが、悟らなかつた人あるいは否定的な無神論者には実在しない。自然現象を通して自然法則を理解するように、宇宙天地万物の生成変化を通して神・天・天道・天理・太極を悟ってもよさそうなのである。わざと偏狭に「無い」と片意地をはらなくてもよい。人々が神を悪用したために、ニーチェは「神は死んだ」と言った。ニーチェの肉体は滅したが、彼の哲学は今のわれわれに機能し生きている。神は無形であるが、神の理、天道、天理は今も生き生きと機能し作用している。天理・自然法則は神の一部である。ワザと神が「無い」といわずに、「有る神」を利用、活用すればよい。

それが人間の「賢明さ」である。

神は「喜びを得るために」対象として宇宙天地、万物を創造した。神の創造は一回限りで終わったのではない。継続的な創造である。すなわち時の流れとともに発展する。限りなき創造、即発展である。

神は「愛の神」である。愛するということは、対象を創造的に発展させることである。父母は子供を愛するがゆえに苦行修学させるのである。子供が創造的・発展的な人格者に成熟したとき、父母は「喜びを得る」。神も同様であり、神の子女である人間・人類が天道・天理に従って限りなく創造的發展を遂げることが望み、それを見とどけて喜ぶのである（現実、現世はその反対）。

神の实在を認識し、天道、天理に従って行動するということは、人間人類が主体となって天地・世界を創造的に発展させることである。神は最高善の権化である。天道は光明正大、公平無私、永久不変の真理である。大我に生きる大人として「天地万物と一体となり」、宇宙（空間・時間）的に創造・発展を成就することである。

（2）人類の成長発展と神の対応

神は一つであり、その本質は不変である。しかし神はその対象によって環境を異にする。同じ父母が成長過程に従って子供に対応する仕方が異なるようなものである。赤児↓幼児↓少年↓青年↓成人の過程によって父母の対応の位相が変わるように、神の愛と恩恵も人間・人類の成長発展過程によって異なってきた。（人間の側からは、時代・歴史・文化の発展につれて新しい格の高い神を認識するともいえる。）

歴史的事実として、人類は量的にも質的にも発展・向上してきた（宗教的には、復帰してきた）が、それは社会集団生活の面で大体次のようにまとめられる。

- 原始人の無自覚的分散生活↓有自覚的群集生活↓家族↓氏族
- ↓部族↓種族↓民族↓単一民族国家↓多数民族国家
- ↓地域共同体（あるいは、超地域の宗教・文化・理念的共同意識体）
- ↓両大陣営（有神論、自由、民主↓無神論、唯物、共産）
- ↓一つの大同世界

このような人類社会の発展段階において、人類はどのように神を認識してきたか、すなわち神がどのように人類に対応してきたかをみれば、大体次の如くである。

① 自然万物に対する多神教的崇拜

自然万物や現象がすべて恐怖と恩恵の対象であった。ヒトリでハダカで投げだされた原始人は、庶物に神を感じ伏した。漸次万物神の間に等級が生じた。日・月・星と名山・大川が格上された。

② 祖先神に対する信仰

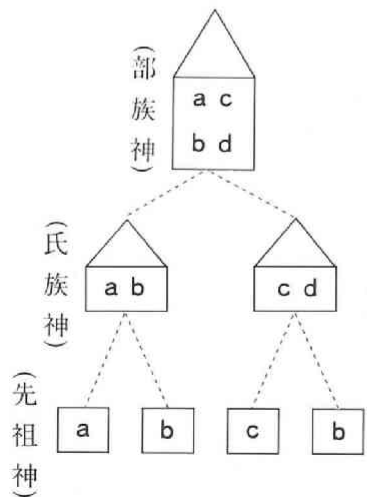
自我意識と生命相統、並びに同族・同類意識をもとにして、根本である祖先神を発見し信仰することによって、縦・横の一体観を固めた。

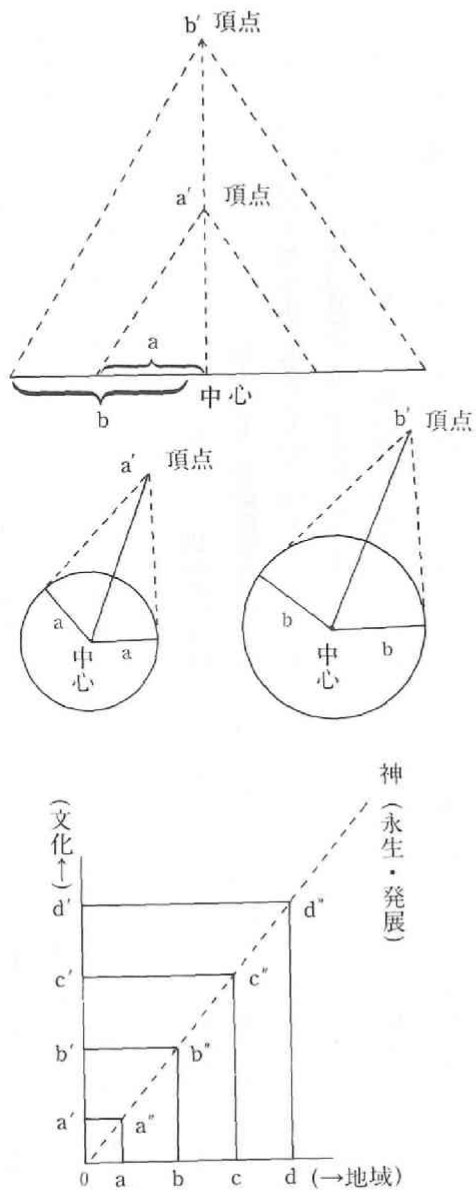
③ 氏族と部族の共同・最高善神

「私とわれわれが一つである」という同類意識が縦・横に拡大されると、氏族社会・部族社会における共同神・最高善の頂点として氏族神、あるいは部族神が現れる。先祖神が部族神に統合される過程は左図のようである。

武力・霸道による征服統合においては、「a・b」でなく「a・c」「b・c」になる。しかし被征服者が完全に「0」になることはほとんどない。米国におけるインディアン、中国における満族等は「0」に近いが、完全零ではない。歴史、文化、意識の「神」として残存している。共同善の頂点である総合神は、その部族に対する絶対権威者である。順従者には恩恵を下賜するが、不順者には災罰を与える。

一方、時代と地域につれて多くの部族が興亡盛衰する。従って部族神の対立、抗争も激化する。宗教戦争がもつとも酷く、いささかの妥協と譲歩もない理由が分かる。（旧約聖書のエホバはユダヤ民族の神であった。）





将来もさらに上昇するであろう。だからといって「一つの頂点、最高善」としての神の本質が変わるのではない。左の如く図示できる。

④ 民族、国家の統合と建国神
 部族、種族の拡大集団化した民族が国家社会を構成するにつれて、すべての統合神として建国神が生まれた。もちろん、一つの頂点、共同かつ最高の善神である。その建国神は、民族と国家を永久に限りなく（時間的、空間的）創造的に発展させる絶対神である。それで、価値的絶対の帰一する宗教信仰と現在・現世的に「よく生きる」政治とは「一つ」であった。すなわち政教一致であった。（現今の世界は皆、政治と宗教を分離している。政治は人為、恣意的に流れすぎ、宗教が迷信、盲信化しすぎたためである。しかもすべての国の政治理念が各々相違している。これでは「一つの大同世界」は期待できない。）

(3) 統合し向上する神

神は「一つ」である。時と所によって「表れ方」が異なるだけである。万物の霊長である人間のうちには、皆神が宿っている。しかし「表れ方」がそれぞれ違うだけである。また環境や学習によって神に対する認識の仕方が異なるだけである。（無神論者だからといって、天や天道を超えて生まれそして死ぬわけではない。）「太極」は微物の中にも、宇宙総体にも宿っている。平面的空間の中心点は、時間の流行とともに頂点として上昇する。そして底面の広さによって頂点と高さも違ってくる。
 人類の歴史と文化は、地域的広さ、数的量、質の高さにおいても発展・上昇してきたし、また将来も限りなく発展・上昇するであろう。従って、空間と時間（宇・宙）を統合した神の位・相も違ってきたし、また

五 結語

アジア共同体、さらに世界大同を実現するためには、まづ人々が「一つの帰着点である神」を中心に復帰すべきである。人間は本性善を持っている。誰でも創造本来の善性に復帰できる。これは宗教的信仰と学習教育如何による。無神論、唯物主義、利己主義は短見である。大我、大人の立場で「私はわれわれ、ひいては天地万物と一体になり」、時間と空間を超えて永遠に無限大に創造的發展を成就する天・天道に帰依しなければならぬ。

宇宙の大きさ、永遠の長さに比べれば、「一個の私」は瞬間的な微物である。過去数百万年の間に人類の歴史に浮沈したすべての「一個人」も、皆瞬間的な微物であった。しかし、その瞬間的な微物の成就の集積によって、今日の人類文化が成立しているのである。それと同じように、将来も、今の「一個の私」の成就によって、もっと創造的發展を続けるであろう。神（天）の創造・發展に同参するために、私は生まれ生きているのである。利己的悪徳は人類の創造的發展、全体の正しき流れへの反逆である。天や天道への逆である。反逆者は後孫に悲しい悪い記憶を残すだけである。人間は必ず死ぬ。反逆したからといって、悪徳でかせいだ財貨を数百年間持ち続け亨楽できるわけでもない。それが天命だ。

さて今日、世界人類は神の摂理、天理に従って「一つに」なりつつある。科学文明、経済文明はもう国境がない。外形的文明生活においては、世界の人々は同様化している。しかし内面的、精神的、思想的、心理

的にはまだまだである。その根本は、心の内にしがついている利己主義的私利私欲である。この心の問題、墮落性の問題は、宗教的次元の教育、修養、信仰生活で克服しなければならない。神はもとから一つであった。それを人々が異なったようにとらえ、違った言葉で述べたのである。故にもとの一つの神に復帰すべきである。

しかし現状は、利己主義によって宗教までが分裂・対立しており、狭い枠内で執着している。まず宗教統一、それから「一つの世界、アジア共同体」を構想しなければならない。